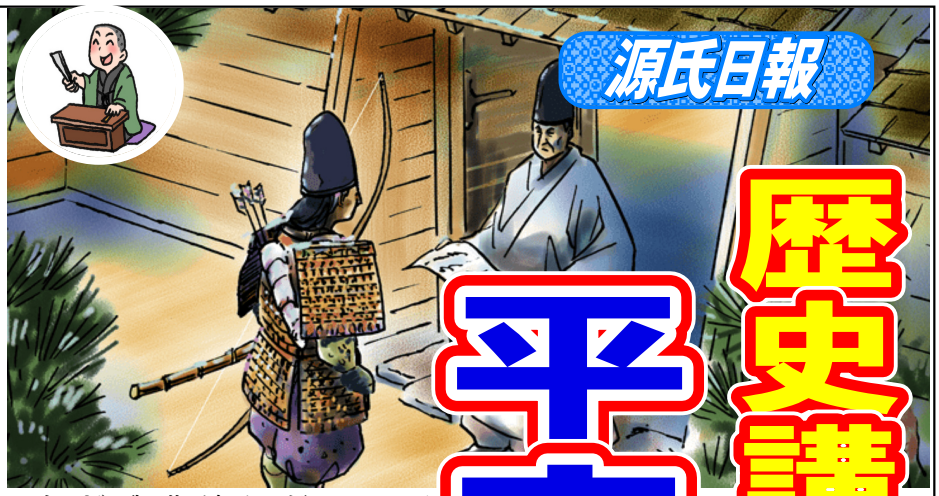

歴史講座 平家物語

今回の主人公は薩摩守忠度「さつまのかみただのり」公であります。パパンパンパン

「薩摩守」というのは、実は言葉遊びからきた洒落で、薩摩「現在の鹿児島県」とは全く関係がありません。

そして、この言葉の意味は「無賃乗車」。ちょっと何言ってるか分からない、ですよね？理由は、こうです。パンパン

武将の役職が「薩摩守」だったのです。

つまり、「薩摩守忠度」←「ただのり」←「タダ乗り」、で「無賃乗車＝薩摩守（ただのり）」というわけです。

パンパン

本家の忠度さまにしてみれば、名誉毀損もはなはだしいのですが、裏を返してみれば、それだけ名前を知られていたということでもあります。

忠度さまにおかれましては、さぞやご立腹とは存じますが、どうぞ広いお心でお許しいただけたらと思います。

平忠度（たいらのただのり）という平家の武将が平安末期におりました。清盛の異母弟で、非常に美しい和歌を詠み、能などの題材にもなった人気の人物なのですが、この話を戻しまして、木曾義仲の軍勢が都へ迫り、平家一門は西国へと落ち延びていきます。パパンパンパン

その中にいた薩摩守忠度は都落ちの途中で引き返し、歌道の師匠である俊成のもとを訪ねます。

忠度の声を聞いた俊成は、門を開け快く面会に応じてくれました。パパンパンパン

忠度は、和歌への熱い思いを語り「これから和歌集を作ることがあるかと思いますが、そのときに使えるものがあれば一首でも使ってもらえたら」と、巻物を渡します。そこには、忠度が日ごろ詠んだ中でも特に優れている歌が百首ほど書かれていました。俊成はその熱い思いに涙を流し、約束を交わします。

その後、世間が平和になり俊成は「千載集」を作る際に、忠度の歌には優れたものが多かったが、朝敵である平家の一員ということで名前を出すことを許されず「故郷の花」という一首を「よみ人知らず」として載せ、約束を果たしたのでした。パパパンパン

薩摩守忠度は清盛の末弟で、武道にも歌道にもすぐれた人物です。平家一門都落ちの際に歌道の師藤原俊成に歌をたくしていった逸話「忠度都落ち」は今日でも教科書などに採りあげられ有名な哀れ深いエピソードです。

忠度は一の谷の合戦で西手の塩屋口を守っていましたが、百騎ばかりの中に囲まれて海岸沿いを東へ逃げ落ちていきます。

そこへ源氏方の岡辺六野太が大将軍とみて呼びかけます。

「ちょっとちょっと、そこへ落ち行くはいかなる人ぞ。名乗らせたまえ」忠度は馬上で軽く振り返り、「私は味方ぞ。間違えるな」

しかし、その開いた口の間から見える歯は真っ黒でした。高貴な人がするお歯黒です。パパンパン

「む。源氏にはそのようなお歯黒をする者はいない。さては、平家の公達であろう」

馬を翔らせ押し並べてむんずと組みます。

忠度を取り巻いていた百騎はみな諸国からかき集めの武者だったので、これを見てわれ先にと逃げ散ってしまいました。なんと薄情な・・・・

「憎たらしい敵だ。味方だと言っているのだから、言わせておけばよいのに」

忠度は熊野育ちの強力で六野太を取り押さえ、馬の上で二刀、馬から落ちたところでさらに三刀刺しますが、いずれも致命傷には至らず、取り押さえて首をかこうとしている所へ、「お屋形さま！！お屋形さま！」パパンパン

六野太につかえる童が駆け寄り、刀を抜き忠度の右腕を付け根からズバアッと切り落とします。

腕を落とされた忠度。もはやこれまでと、六野太をつきとばし、「念仏を唱える。しばらくどいておれ」

西に向かい高らかに念仏を唱えているところを、うしろから歩み寄った六野太がズバッと忠度の首を討ちます。

忠度の最後であります。パパンパン

「はて。名のある平家の大将軍と思われるが・・・・ついに最後まで名乗られなかった。一体どなたであろう」ふと見ると箙に文がくくりつけられており、それを解いてみると、「旅宿花」という題で一首の歌が書かれていました。

ゆきくれて木のしたかげを宿とせば　花やこよひのあるじならまし　忠度

旅の途中で日が暮れてしまった。今宵は木の下の陰を宿として眠ることにしよう。

さしずめ花が今夜の宿のあるじとなって、私をもてなしてくれるだろう。

イキな歌ですが…、これが忠度の辞世の歌のようになってしまいました。パンパン

「おお！忠度殿じゃ！」

「忠度殿…」

「武道にも歌道にも聞こえの高い、あの薩摩守殿か！

なんと惜しむべき大将軍を…」　薩摩守忠度が討たれたと聞き、周囲にいた敵も味方も、みな涙を流し、袖を濡らさぬ者はありませんでした。

忠度都落ちの一説でした。

続編は、第3木曜日に語りたいと思います。